

新会長挨拶

新しい試みの場、人工知能学会



田中英彦*

人工知能という言葉が使われるようになってからかなり経ちます。しかしながら、その言葉が、どういふニュアンスで使われるかは、その時代背景を反映しています。1980年代は、第五世代計算機プロジェクトの明るいイメージがあって大変肯定的に使われていました。しかし、ここ数年は、その反動もあって、この言葉はむしろマイナスイメージに捉えられ、企業のなかの研究部署の名前としても使われなくなっていると聞きます。

この原因は、「人工知能」という言葉の意味が大変狭く捉えられ、例えば、単にエキスパートシステムを意味したり、逆に、はるか将来の「出来そうにもない研究」として捉えられるところにあるのではないのでしょうか。実際はこの言葉で捉えられる領域は大変広く、さまざまな情報を知識として捉え、それをシステムの重要な一要素として用いる知識処理技術や、自然界に存在する知能のメカニズムを分析し、それにならって優れたシステムを実現する智能工学は、疑いもなく、今後の重要な基盤技術です。各所に分散した知能を通信網によって結合し、より優れた統合知能を実現するという形態は、今後のネットワーク利用のほとんどがそれに当たると考えることもできます。従いまして、人工知能分野の果たすべき役割は、その用語のイメージはともかく、その実質的な重要性に異論はないものと思われまふ。

しかしながら、学会としての役割を考えると、日本のなかで考えれば、情報処理学会や電子情報通信学会、ソフトウェア科学会、自然言語学会など、関連分野には実に多くの学会が存在し、それらが異なる観点からにせよ、基本的に同種の問題を扱う方向に向かっているのが現状であります。これらの整理統合は、効率を上げるための重複除去という観点からすれば、当然今後検討すべき方向であります。これらの学会が、論文、研究発表、幹事メンバなどの資源を奪いあう状況は、あまり自然とも思われません。

しかし、学会の存在意義は、単なる効率で測れるものだけではないはずす。程度問題ではあります。同種のことをやる相手がいることは刺激的です。それらの間の競争原理に基づく活性化の利点もあり、それぞれの持ち味もあります。

人工知能学会内に設置された将来計画委員会でこの1年間、この学会のめざすべきビジョンが議論されました。そこで、上のような現状を踏まえ、今後のあり方を検討した結果、以下のような意見にまとまっています。すなわち、この学会のあり方としては、広く人工知能分野を捉えてこの方法論の発展を図ること、論文評価の仕方を複数の視点で行いアイデアなどの提案を行いやすくすること、この分野のテリトリーの差異で他の学会との独自性を出すのではなく、むしろ、新分野開拓の態度で存在を主張すべきであること、などです。すなわち、新分野を自由に討議し育てていく柔軟さや、自己否定性をも有するダイナミズムに、この学会の依って立つ基盤を求めようというのです。逆に言えば、人工知能の分野は、今後大きな発展が期待されるだけに、その発展を大いに啓発する場になりたいというわけです。

学会の役割にはさまざまなものが考えられます。上のような新分野開拓としての役割以外にも、既存技術や学問の伝承の役割もあります。しかし、これらすべてに等しく目を向けるのではなく、どこかに特色を出そうというのであります。

本学会は、今年で10周年を迎えました。当初の進取に満ちた建設の時期を過ぎ、着実な発展を目指す時期に入っています。ここで今一度、この学会の存在意義を再認識し、しっかりと育てていく必要があるように思えます。そうして、皆様とともに、この学会の規模や特色を生かし、新たな試みのやりやすい、ダイナミズムを持った柔軟性を育てて、来世紀の学問・技術を生き生きと花開かせていこうではありませんか。

* 東京大学工学系研究科電気工学専攻教授